

ちえおくれの幼児のための教材

西山恭子

十月下旬に東京で、日本玩具國際見本市が開かれました。日頃、ちえの遅れた子どもたちに、どんな玩具を与えたらいいかと、デパートやおもちゃ屋さんを見て廻つても、なかなかこれぞと思う玩具

いでくわないので、大いに期待をもつてでかけてみました。ところが、がっかりしてしまったのです。

都立産業会館二階から五階まで、各階ぎっしり玩具が並んではいるのです。しかし、これこそ子どもたちに与えてみたいと思った玩具が、なかなかたのです。子どもたちというより、私自身がとびつきたくなるようなものが、見当りませんでした。丁寧に一つ一つ見て廻れば、中にはうきうきするほど楽しくなる玩具があつたかもしれません。しかし、目新しいものどころか、その色と響きとにいささかくたびれましたし、時間が制約されていたことも加わって、四・五階になると「ああ、また同じか」と数か所素通りしてしまいました

つくづく思ったのです。日本の玩具というものは、子どもの立場にたつてつくられたものが非常に少ないと。玩具の生産量はアメリカに次いで世界第三位とのことです、量においては第二位であつても、質においては決して玩具王国とはいえないと思いました。

最近ではメーカーの方々も玩具の重要性を認識して「おとなのが興味で遊ばず、子どもの生活や遊びを中心と考えるべきです」。また「丈夫で安全なおもちゃを選びましょう」などと、本もだしていらっしゃいます。しかしたいいの玩具は、ちえ遅れの子どもたちに与えると、二・三日でこわれてしまします。ですから、まず丈夫なことを玩具の第一条件にしている私どもは、会場で「これ丈夫かし

ら」と触ってみたら、ピシッとひびの入ったプラスチックのまま」とがあり、会場係の方と思わず苦笑した場面もありました。

玩具のメーカーに対する不満はこのくらいにして、愛育研究所、家庭指導グループでは、ガラガラからマットまで、大小含めて一年間に百数種類の玩具を与えましたが、その中からヒットした玩具をいくつか紹介したいと思います。

はじめに家庭指導グループについて簡単に説明いたしますと、このグループは、精神発達遅滞児のグループで、私どもは、この子どもたちに、集団治療教育を行なっております。治療教育ということに関しては、またいずれかの機会に譲ることにします。子どもたちの生活年令は三才より七才五月まで、平均五才三月。発達年令は一才四月より三才八月まで、平均二才二月で二才代が最も多く、一才代がこれに次ぎます。発達指数は二五より六七、平均四三で三〇台と四〇台が多くなっています。クラスは三才児だけ八名の週一日

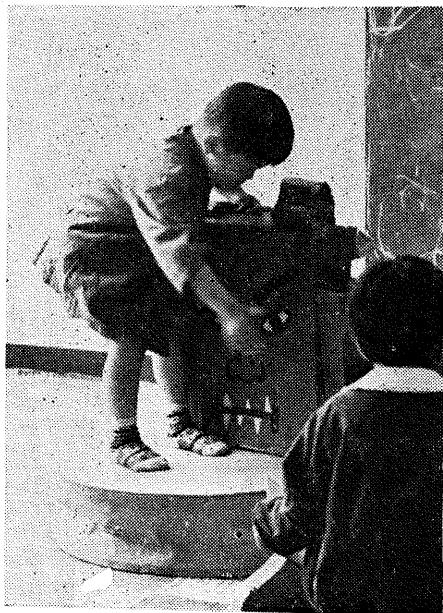
クラスと、四・五才児を中心の週二日クラスがあり、こちらは一クラス定員十二名ですが、ちょっと多すぎるようです。一クラスについて主として二名の指導者が指導にあたり、あと一名が記録兼ヘルパーとして参加します。精神発達の遅滞した児童は、だれでも申込み順に、欠員があり次第グループに入ることができますので、単純なちえ避けだけでなく、明らかに脳外傷による子どもや、自閉症的傾向をもつ子どもなどが含まれています。

精神の発達が遅れている子どもでも、その諸能力はまだまだ発達の途上にあり、多くの可能性をはらんでいます。従つてこの子どもたちの発達に適した環境と刺激を与えることが必要であり、玩具のはたす役割も大きいわけです。子どもによつては歩行能力が弱く、ヨタヨタ歩いているものや、電車に乗れば、つり皮にぶら下がつて、くるりと回転するという子どもまで、運動能力一つを取り上げてみても、その差は大きい上に、子ども一人ひとり、その発達はアンバランスな面が多いので、玩具の選択に苦労します。私どもは、精神発達遅滞ということを抜きにして、生活年令二才前後用の、ごくありふれた玩具をまず揃え、さらに身体活動に役立つ玩具、社会性を養うのに適した玩具、知的能力の開発に役立つ玩具などを考慮して与えております。その中でヒットした玩具を、今回は私たちの作製によるものと外國製品のものを紹介いたします。

(一) 鬼あて（写真1）

ボール遊びは、運動能力を促進させるのに役立ちますが、グループの子どもたちは、ボールを投げてもそのボールが目の前に落ちてしまつたり、力一杯投げられる子どもでも、あらぬ方向へ飛んでしまいます。そこで、より一層ボール投げに興味を持たせたい、そこには投げたくなるような目標をつくつてはどうかと、遊園地の鬼の腹に玉をあてるゲームからヒントを得てつくつたものを、鬼あてと名付けました。

縦、横、厚さ各々四十二センチ、三十五センチ、十二センチのダーニボールの空箱を利用して、これを縦長に置いて、箱の二面に鬼の顔と、笑ったヘコチャンのような顔を書き、その箱の中に鈴を入れました。これを適当な高さの台の上において、これも適当な距離から大きなボールを投げて、その鬼の面を倒すのです。ボールがあたって倒れると、中に鈴が入っていますので音がしますが、その倒れる瞬間が面白いらしく、笑いの渦の中で次から次へと子どもたちが参加します。倒れるたびに起きねばなりませんので、市販されていまするビニールの大きな起上がり小法師（ロンバーレームのジャックさん、おばけのＱ太郎など）の方が便利だと思われますが、子どもた



(1)

(二)

ちには鬼あての方が断然人気がありました。子どもによつては、鬼の顔よりヘコチャン的な顔の方にボールをあてたがる子どももいました。容易に倒したくてボールを投げずに近よつてぶつけられる子どももいました。能力によつて高さをかえたり、距離もだんだん遠くしたりしながら、笑い声とともに楽しく遊べる玩具の一つです。

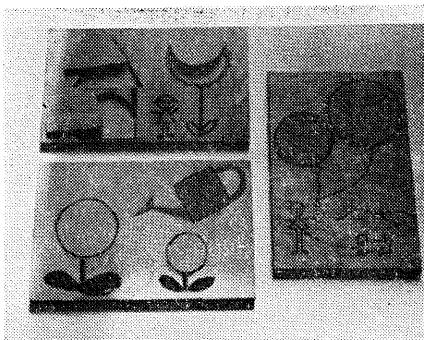
(二) 布ホール

これは運動会で玉入れに使う赤玉・白玉と同じもので、中に綿をつめました。どこにでもあるものですが、これを部屋の中で玩具として与えたところ大変よく遊びましたので書添えました。主に子ども同志ぶつけ合いをしていますが、体にあたつても痛くないので、対人的活動の少ないいちえ遅れの子どもたちには、この遊びによつて対人関係もついていきますし、なんでもボーンと投げることの好きな子どもには、それを禁止する前に、布ホールをかごに入れたまま与えたところ、積み木やままごと道具を放りなげることがほとんどなくなりました。

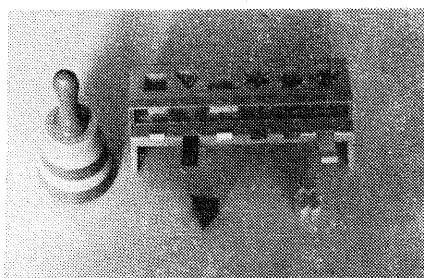
(三) はめ絵(写真2)

市販されている玩具は、感覚的なもの、生活的な遊びに必要なもの、運動を楽しむもの、動くおもちゃといったものが多く、知的能力の開発に役立つようなものはほとんど見あたりませんので、そういったものを私たちで作製してみました。厚手のボール紙によるピクチャーバズルがありますが、市販しているものは、このグルー

(2)



(3)



(4)

プレー・シェイプ——イギリス製——（写真3右側）

これはプラスチック製品です。全体の色が薄いグレーで、三角・四角など六つの窓みに同じ型をはめ込むもので、形の認識の目的をもつた、教具という方が適しているような玩具です。子どもたちはパツと飛びつきました。前述のはめ絵の立体化でもあります。平面的なものより立体的なものは、一步高度ではありますが、穴につめたり入れたりすることの好きな子どもたちには、その興味を満足させてくれますし、楽しみながら形の認識ができるわけです。はめ込む方の型とそれを支える板とが同色になっていますので、形の認識のできない子どもは色別によってはめ込むことになります。グループの子どもにプレー・シェイプを二つ買つて型と色とをバラバラにして与えたところ、一つのプレー・シェイプでは形の認識ができていると思った子どもが、色によってはめ込んでいる例がかなりありました。大きさも手頃で、手先の運動機能の劣っている子どもには、その感覚訓練にもなり、手に麻痺のある子どもが、気に入つて、一心にやっています。

（西武、伊勢丹デパート五五〇円）

(五) リング・ベル——イギリス製——（写真3左側）

これもプラスチックでできており、分解のできるベルです。取手はねじ式で取りはずしができます。鈴の入っている底は緑色で、これに芯棒がついており、他にまるいプラスチックが四つ、大きい順に黄色、赤、青、ピンクとあります。この四つのまるいプラスチック

クを芯棒にとおして、取手をつければ元のベルができ上ります。

順番を間違えると形が不揃いでベルの形になりません。色の名前を覚えたり、大きさの違いが自然に分るというしくみです。プラスチックの色が、日本のものより不思議にきれいですし、少々投げてもこわれません。がっかりしております。音がすること、分解できること、取手をまわすこと等、音を楽しんだり、手先の感覺訓練が、色の認識や形の認識に結びつくといった、一つの単純な形の玩具が、いくつかの機能を含んでいます。なかなか行き届いた玩具です。子どもの中には大きさなどお構いなしで、ただ懸命に芯棒にとおすことに熱中する子どももいますし、ねじ式の取手のとりはずしに苦心する子どもなど、機能が多ければ、またそれだけ、子どもの遊び方もあります。

(西武デパート五〇〇円)

(4) ビジイ・ボックス——アメリカ製——

ベットの横に取りつけて音を楽しみ、絵を楽しみながら、それが手先の運動になるといふのです。猫の鼻のつまみを押せばキュー音がしたり、ボタンをまわすと次から次へといろいろな絵がでてきたり、戸を開けると鏡になっていたり、汽車を引っぱるとギギー音がしたり、下に引っぱる時はね返したりするものなどが一つの台についています。普通の子どもの九ヶ月から四才用となつてますので、ちょうど発達年令が二才頃の子どもたちには適しているようです。他の玩具にはほとんど興味を示さないので、このビジ

イ・ボックスにへばりついている子どももいます。一つのビジ・ボックスに二・三人の子どもが集まつても、押したり引っぱつたり廻したりなど、いくつもの触れるものがありますので喧嘩になります。 (伊勢丹デパート二〇〇~二六〇〇円)

イギリス製にしてもアメリカ製にしても、第一に丈夫なのです。プラスチック製のものは、日本製のベラベラなものではなく、厚いものを使用しています。さらに色の調和がよく、原色を使ってもどぎつきを感じさせません。その上、使用する子どもの立場にたつて造られていると思います。

一般に才能のすぐれた子どもの場合には、短かくて四・五日、長ければ一ヶ月前後一つのおもちゃを持ち続けるとみてよいそうです。それが一方ではここにあげたような子どもが飛びつく上に丈夫でもある外国製の玩具を見ると、われわれの手で、自信をもつて子どもたちに与えられる玩具をつくりたいと思うのです。
それには消費者もメーカー側に進んで協力すべきだと思ひますし、且下ブームといわれているデザ・ン関係において、玩具は一步遅れている感じですから、玩具専門の優れたデザイナーが今後どうし出現してほしいと願っています。